

今回、私は東京大学・企業大学訪問に参加させて頂いた。たった2日間という短い間ではあったが、宮城では感じ取ることの出来ない貴重な体験になったと思う。

東京に到着するとまず、笹川平和財団などが主催の夏季プログラムに参加した。「世界を視野に、自らを生かす。」というテーマだったが、正直参加する前はどのようなものなのか上手くつかめず戸惑った部分もあった。しかし、今振り返ってみると企業大学訪問と肩を並べる重要なものだったと思う。

笹川平和財団の理事長田中伸男氏からは、国際的なエネルギーの現状について詳しくお話を頂いた。IEAはOPECとライバル関係にあることで均衡を保っていることや、モンゴル・中国・日本をパイプラインでつなぐという大胆な構想があることなどを知り、「世界を視野に」活動することのスケールの大きさを実感した。また、原発についてのお話もあった。東日本大震災を経験した私たちにとって無関心ではられない話題だったが、田中氏は「技術で事故を防げる」とおっしゃっていた。将来的には、さらに技術が進歩し二度とあのような事故を繰り返さないようになればいいと思った。

その後のグループセッションでも、多彩な経歴をお持ちの講師の方にお話を伺った。北極海などで海洋研究をされている方、ブリヂストンの執行役員の方などであったが、どの講師の方にも共通して言えることがあったと思う。それは、知らないことを知りたいという知的好奇心にあふれていて、実行力に優れているということである。だからこそ、日本にとどまらず世界でご活躍なさっているのだと分かった気がした。

これらの午前中のプログラム終了後、築地場外市場の寿司屋で昼食を取った。本来行きたかったお店が混雑していて行けなかったのだが、急遽入った寿司屋もなかなかの美味しさだった。ただ、仙台に比べて値段が張ったため、物価の違いを感じた。

続いて企業大学訪問ということで、国立がん研究センターへと向かった。私たちは、ゲノム生物学研究分野の河野隆志分野長を始めとする先生方にお会いした。最初はゲノムに関する専門的な話がされるのかとかなり緊張していたが、先生方は気さくに話して下さり、和やかな雰囲気の中でお話を伺うことができた。

始めは、主に先生方のプロフィールや学生時代のストーリー、医師になろうと思ったきっかけなどについてお話をさせて頂いた。先生方は出身大学もほぼバラバラで、医師を志したきっかけも多種多様だったと思う。中には、作家になりたいと思っていたのに医学に関する本を読んで志望が医師になっていったケースもあり、意外に感じた。しかし、そのような各々の進路を進んできて、今は『国立がん研究センター』という一つの医療機関で先生方は研究をしている。そこには、国の最先端の研究に携わり多くの患者を救いたい、という強い意思があるのだろうと思った。

もちろん、研究に関するお話も伺った。ゲノム生物学研究分野では、がん患者などのゲノムを解析し、最終的には患者一人一人にオーダーメイドの医療、つまり個別化医療を実

現することが目的となっている。それによってより高い治療効果が期待できるということだったので、本格的に実用化されれば日本のがん治療は大きく進歩するのではないかと感じた。

企業大学訪問が終わった後はホテルへ行き、夕食の後に OB・OG による懇談会に参加した。主に東京大学に在籍している先輩方の生の声を聞く貴重な機会だったので、とても楽しみだった。

会が終わって感じたこととして、まず「価値観の多様さ」が挙げられる。先輩方は非常に個性的で話している時間があつという間だったのだが、(さっきの先輩と違うこと言うて…) と思った場面が多々あつた。しかし、どの先輩も考え方に一つの芯がありそれを軸として話して下さっていると感じたので、とても興味深かつた。

その中でも特に印象に残っていることがある。それは、ある先輩が言っていた「見かけと実質の見分けをすること」、そして「最後に勉強するのは自分」というものだ。前者に関しては、今まで自分は多少なりとも形を優先し中身をそこまで深く考えないというところがあつたと感じた。そうではなく、これは本当に自分にとって重要なのだろうかと思慮して行動することが自分の目指す進路のためには必要なのだと思う。後者について言えば、とても当たり前のように見えるが核心を突いているのではないだろうか。最近、私も含めて塾へ通う学生が多くなっている。しかし、時に塾だけを頼りにして自主的に勉強をしなくなつたり、逆に塾に行く気がなくなつたりする人がいるように感じる。私もそんな気持ちになるときがあるが、最終的に受験するのは自分なのだという自覚をしっかりと持ち、志望校合格をつかみ取りたい。

二日目は、東京大学オープンキャンパスへ向かつた。午前は時間があつたため、『健康と医学の博物館』へ行き常設展・企画展ともにじっくり見てまわつた。常設展では、東京大学医学部が歩んできた歴史について詳しく展示されていた。それによると、東京大学医学部のルーツは「お玉ヶ池種痘所」という種痘所だつたようである。何となく、東大の医学部だからすごい人が設立したのかなーと思つていたが、庶民に根ざした組織から始まつたと知り意外だつた。しかし、人工がんの発生に初成功したり、アレルギーの原因となる免疫グロブリンを発見したりするなど、さすが日本の最高峰の大学だと思わせられる内容も多くあつた。

また、東大には意外なことに和風カフェがある。オープンキャンパスの日も例外なく暑く、「かき氷が食べられる」と聞いていてもたつてもいられなくなり、同じ班の男子と向かつた。優しい口当たりのかき氷にきなこ黒蜜が相まつてとてもおいしかつた。ボリュームもかなりあり、(そのためか値段も張る) お店の雰囲気も大学にいるとは思えないデザイン性のある空間だつた。東大に行つた際には、ぜひ立ち寄つてみてはいかがだろうか。

そして、午後は薬学部の説明会に参加した。薬学部と聞くと、私はひたすら薬と向き合つているイメージがあつたが、参加してどうやらそうでもないと分かつた。人体の仕組みを理解し、新たな薬を生み出すとともに、その薬がどんな作用をするのかなど様々な分野

の知識が必要になってくるようである。また、薬学部の学部長は「国民の関心は自分の健康である」といったことをおっしゃっていた。そういう意味では、薬学部という学部は社会において重要な役割を担っていくのだろうなと思った。

また、本来なら医学部の説明会は参加することが出来ないのだが、席が余っているということで説明を聞くことが出来た。事前申し込みで医学部の説明会が取れず、少しがっかりしていたところだったのでうれしかった。

説明会では、講師の方が主に「東大医学部のミッション・課題」について話して下さった。それは、「現在の最高の医療を遂行する」ことである。プロフェッショナルな職業に就く意識を養い、国際的指導者となる人材を育成することで、このミッションを果たそうとしていると分かり、この学部のレベルの高さを改めて実感した。

以上が、この2日間の軌跡である。世界を舞台に活動する方々、がんに立ち向かっていく医師の方々など、仙台では到底出会うことが出来ない人にお会いし、幅広いジャンルのお話を伺うことが出来た。自分の視野を広めようと思って参加したが、その目的は十二分に果たせたと思う。今の夢は医師であるが、今後それが変わり迷ってしまうことがあるかもしれない。たとえ夢が変わらないとしても、今回学んだことはこれからの自分の糧になると確信している。

最後に、お話を直接聞かせて頂いた笹川平和財団とダイレクトフォースの講師の方々、そして国立がん研究センターの先生方に感謝の意を示し、感想文を締めくくらせて頂きたいと思う。



<築地にそびえる国立がん研究センター>